

の都合上事前に〇三(六七二)六〇九五番へ電話で申し込まれたし。

祇園祭協賛各派合同琵琶演奏会

七月二十三日(休)夕五時京都祇園八坂神社能楽殿、京都琵琶協会協賛。(順不同)鴨川の露、細川旭穂、堅田落、岡本旭村、河内の宿、楊光子、敦盛、楊嶽水、小栗栖、村山旭穂、本能寺、梅原旭濤、広瀬中佐、山岡旭清、城山、山田明嶺、台湾入、矢吹旭美津、五條橋、牧南水、伽羅の兜、青木一江、日本海大海戦、平井春嶺。

大阪安居天満宮琵琶奉納大会

七月二十五日(出)十時十七時、大阪琵琶同好会協賛。敦盛、大矢、吉野、徳古、藤原、扇の的、多和、湖水渡り、山田、河内の宿、米原旭大、川中島、辻旭城、菊水の旗、玉村旭正、大楠公、福本、衣川、西村旭瑞、岸壁の母、小林一水、白虎隊、島津旭都、壺坂寺、作花旭友、姫ゆりの塔、石田旭扇、関ヶ原、柴田、菅公、石橋旭嶺、茨木、野々村旭心、大阪夏の陣、天津八千代。外に扇舞、剣舞、日舞等敬番。

筑前琵琶紅会

八月一日(出)昼東京日本橋三越劇場、主催紅会、司会NHK鈴木健二アナウンサー。全会員並びに筑前琵琶数氏賛助出演の外他各派の名流木原綾子、友吉鶴心、杉山旗水、遠藤鶴東の四氏協賛出演。会歌くれない、会員一同、本能寺、薄雅子、絃旭鳳、月に偲ぶ、浜野旭愛、絃旭豊、旭良、王昭君、春日旭芳、絃旭粧、旭盛、扇の的、深谷穂繁、絃都錦穂、大楠公、石井旭良、衣川、藤内旭須美、伽羅の兜、三上旭鳳、曲垣平九郎、木原綾子、二

〇三高地、若宮旭登、名将加藤清正、小笠原旭星、絃旭窮、浜松城、宮武旭豊、大物の浦、仲川旭朋、絃旭窮、挨拶、紅会々長鍛冶栄二、吟詠、人面桃花、石井旭良、絃旭窮、旭須美、替手旭鳳、立方藤間理衣、月見草、三上旭鳳、藤内旭須美、絃旭窮、旭良、琴米川、立方藤間京美、西郷隆盛、友吉鶴心、若き敦盛、原島旭粧、龜山上皇、遠藤鶴東、細川ガラシ、夫人、会主押田旭窮、物語琵琶宮本武蔵、杉山旗水、綱箱、原島旭粧、原田旭柳、仲川旭朋、絃旭鳳、旭良、旭須美、小絃旭窮、外に詩吟三題。

筑前琵琶ひよっこコンサート

八月二十五日(休)午前十時半大阪津村別院ホール、大阪旭香会、京都琵琶三美会共催、山崎旭幸会後援。(次号詳報)

京都琵琶協会八月例会

八月三十日(出)昼二時会員梅原旭瀧女史宅。(次号詳報)

ラヂオ琵琶放送

八月十三日(休)午後三時十分NHK・F.M.「小栗栖」(三十分間)、押川旭葉女史放送。

予告

〇：近県親善錦心流琵琶演奏大会 九月六日(出)正午秋田市協働社大町ビル、主催一水会秋田支部。(秋田、新潟、酒田、鶴岡の四支部員出演)。
〇：大阪堺開口神社秋祭琵琶献奏会 九月十三日(出)午後一時、大阪琵琶同好会協賛。
〇：薩摩琵琶演奏会 九月二十三日(出)昼八戸

市民会館、主催最上穂洲氏。正絃会員の外岩手、青森両県同志出演。
〇：京都琵琶協会九月例会 九月二十七日(出)午後二時、本部平井会長宅。
〇：第十八回日本琵琶楽コンクール 九月十七日(出)午前十一時東京銀座座ガスビル六階、日本琵琶楽協会主催。出場資格、協会員並びにその推薦者、演奏時間一曲七分以内、参加料一万円、曲数四十曲。
〇：筑前琵琶協会全国大会 十月四日(出)広島市中国新聞社講堂。
〇：筑前琵琶協会全国大会 十月二十四・五両日(出)、東京大手町農協ホール。

きかとあ

暑い、暑い、ほんとうに暑い。本号がお手許に届く頃には朝・夕は余程暑くよくなっているようだが、本号編集中の八月上・中旬の「燃えるような暑さ」は正に「炎暑」である。寒さには負けない編集子も夏は三文の値打ちもなく毎日氣息奄々で、九月の声を聞くとやれやれと心の底から感じる。仏典には熱い地獄が説かれている。地獄のような暑さは八月上・中旬を云うのである。本号から「おんなの都」と題して琵琶で演奏される女人像(小督・常盤・静・祇王・仏・建礼門院・皇女和宮・横笛・淀君・芸妓幾松など)をしばらく連載する。実説もあり作品もあるうが読んで頂いて興味深いと思う。御期待下さい。

昭和五十六年九月一日発行(非売品)
編集者 植村 寛
発行所 京植村 寛
〒565 吹田市山田東二丁目三番地B(一)水
電話 〇六(八七五) 〇三二六番

琵琶 機関紙

京

結

第三二七号 京 絃 社



ばくすい

幕府が力を失って万事朝廷の指揮を仰ぐようになったのは、孝明天皇の徳による処が大きかった。弘化三年(一八四六)二月、十六歳で天皇につかれたが、まもなくアメリカの軍艦が浦賀へ来た。「小敵と雖も侮らず、大敵と雖も恐れず、よく謀をめぐらせて国体に瑕瑾をつけぬよう十分に処置せよ」との勅諭を幕府に下された。

井伊大老と安政の大獄(六)

思う心のひとすじに吾が身ありともおもはざりけり」と歌い、同じく大獄に追われて薩摩の海に身を沈めた僧の月照は「大君の為には何か惜しからむ薩摩の瀬戸に身は沈むとも」と嘆き、桜田門の変の關係者として獄死した佐久良東雄は「わが為は何祈るべきさいはいも君がためにも思ひこそすれ」と歌っている。朝廷に反対して幕府の存続を希望し、將軍の權威を高めようとしたのは会津藩主松平容保で、今は京都守護職として兵を率い在京している。すると文久三年八月十八日早朝、会津、薩摩の藩兵は御所警備にあたり、その武力を背景として朝廷の空気は一変し、かねて計画中の天皇大和行幸は中止、三條実美らの朝廷出仕を差し止め、長州藩の宮門警衛は薩摩藩兵に代った。つまり尊王攘夷を主張する者(実は幕府討伐を企てる者)を朝廷から締め出したので、三條実美や長州藩には復讐に水の大きな驚きであったが、やむを得ず三條

嘉永四年天皇二十一歳、勅命によって和氣清麻呂を神として祭り、正一位護王大明神を贈られた。それは曾て道義地に墜ち国家革命に瀕した時、清麻呂は身の危きを顧みず雄々しく烈しい誠の心をつくしたことを追賞されてのことであるが、佐久良東雄は感激に堪えず、直ちに雨中を高尾山の護王大明神々前にぬかづいて「皇まもる神のまします高尾山、あかき心のみゆるもみじば」と詠じた。安政の大獄に倒れた梅田雲浜は「君が代を

ら七人の公卿は長州藩士と共に長州に下った。琵琶歌にある「七卿落」とはこのことである。それからしばらくは尊攘即ち討幕派の人々は苦しい立場に置かれた。文久三年八月、大和に挙兵した天誅組の藤本鉄石、吉村寅太郎、松本奎堂、伴林光平等も、但馬の生野に兵を挙げた平野国臣らも総て失敗し、長州藩の全力をあげ更に諸国有志の力を結集して局面の打開を計った元治元年(一八六四)七月十九日の上京も会津、薩摩、越前、桑名、彦根その他の諸藩の守りを破ることが出来ず、激戦の末敗退した。蛤御門の戦とか、禁門の変とか呼ばれるもので、この戦に久坂玄瑞、入江九一ら吉田松陰門下の逸材も戦死し、総指揮者真木和泉守は天王山で自決した。

吉田松陰の門人高杉晋作、齡二十七、伊藤博文、山県有明らと共に兵を挙げて下関に拠り、藩内和平派と戦ってこれを破り、桂小五郎(木戸孝允)、前原一誠、井上馨等協力して一藩の大事に当り、前の恥辱を雪ごうとしたので、幕府は慶応元年四月再び長州を征伐しようとするが、既に衰弱の極に達して全身不随、何とも出来ない。その間に薩摩と長州の間に諒解が出来た。いわゆる薩長連合である。長州は木戸孝允、薩摩は西郷隆盛。木戸は元治元年六月、京都三條の池田屋に新選組が襲った時辛うじて助け、西郷は安政の大獄が始まった時、憎月照を助けるために薩摩へ連れて行ったが、藩当局は月照を許さず、情誼に厚い西郷は安政

五年十一月、月照と共に入水するが西郷だけが助かった。この木戸と西郷は坂本竜馬の鞍馬に会い、薩長同盟の約を結んだ。

慶応二年七月將軍家茂病歿、一橋慶喜がその後を継いで將軍になった。慶喜は英明を以て聞こえたが、安政大獄以前ならば兎も角、慶喜の今となってはどうにも仕方がなかった。然し、やがて「大政奉還」という大きな仕事を完成したのである。

おんなの都

郡 恵 一



京都清水寺の東南にあたる辺に、歌の中山と呼ばれる小路がある。音羽の滝よりこの小路を伝って行くと、やがて清閑寺に辿りつく。この寺は渋谷越えの山道に面している。

小督の局 (1)

清閑寺の横合いに高倉天皇陵があり、陵の片側に寄り添うように立てられた印塔がある。これを小督の局の塚であるといひならわして、そこに一つの哀話秘められている。

昔、治承の頃宮中に小督の局という美しい女房がいて、時の天皇高倉帝の中宮徳子に仕えていた。小督は宮廷随一の美人で、琴の上手として知られている。父は櫻町中納言で平治の乱の大立物、信西入道の三男であり、小督も心のやさしい少女で中宮徳子に愛されて

宮仕えをしているうちに、冷泉大納言に見染められることとなった。

當時は一夫一婦制というわけではなく、また結婚して男女が生活を共にするという規則もないので、恋愛も誠に自由であった。いや、男にとつては自由であったというべきで、男は何一つ女を保護しようと思わず、花から花へと飛び廻る蝶のように、無責任な生活をしてきた。しかし女性にとつては不安の上なく、一たん花の盛りを過ぎてしまふと顧みられなく、そのはかなさは花の運命のようであった。

小督を見染めた隆房卿は、歌を贈り手紙を届けて熱烈な愛を示したので、遂に小督は隆房の愛を受け入れる身となった。

一方、淋しい身の上の人があった。それは時の天皇で、この方は八歳で即位され、十一歳で清盛の二女を女御に迎え入れられた。つまり平清盛が権勢をふるうため、一天万乗の天子も彼にとつては飾り難であった。即ち十一才の天皇に四才年上への二女徳子を押すつけ、女御から中宮に仕立てあげた。

それから七年後、高倉帝と徳子の間に言仁親王(後の安徳天皇)が生誕した。清盛は待ってましたとばかり、僅か三才の幼児を天皇の位につけ、高倉天皇は年二十にして上皇と呼ばれる隠居となってしまわれた。

高倉上皇は心中面白からず、まして中宮徳子(後の建礼門院)は四才も年上であつて、結婚生活既に九年という古女房である。上皇は徳子に仕える女房の、そのまた女童(女中)

葵の前という少女の可れんさが気に入り、寝所に召し出して寵愛した。ねたみ深い宮廷の女たちは、この少女を葵女御などと呼んで噂が広まったので、上皇は思い悩んで遂に葵の前を宮廷から遠ざけた。世間体を恐れ、また清盛に気兼ねしてのことで、実際は上皇の憂悶は増すばかり、しかも里に帰った葵の前が病気で死んだと聞いては尚更のことである。

この上皇の愁いを慰めんとして召し出されたのが、即ち小督の局である。

飯盛山の白虎隊

鶴ヶ城は燃えおちる

辻 旭 城



会津盆地の主邑、若松落城の哀史はあまりにも有名で、飯盛山白虎隊士の墓前には香華の煙がたえない。鶴ヶ城は復元した天主閣が当時の面影を伝えている。

朝もやの中からお寺の鐘が響きわたる。松笠をかぶった近在の農婦たちが、畑から収穫した作物をリヤカーに積んで、静かな街並みを得意先へ急ぐ。

会津若松駅で降りて構内を出ると、知らぬ町にやがて来た期待と不安が入り交じり、とまどってしまった。バスターミナル前には「獅子の時代」の大きな看板が立てられていた。

駅前公園で地図を広げて、中央通りを直ぐに鶴ヶ城まで歩いてみようと思つた。人口約十一万の会津若松市。ぶらぶら歩きの楽しい街で、積み重なった歴史の古さを至る所に感じさせてくれる。何代も続いた造り酒屋や漆器店、駄菓子屋などの老舗がごく当り前のように建ち並んでいた。

大都會と違って、思わず家の中をのぞき込みたくなるような、幾百年か続く古びた暖簾のかかった店、成田山不動尊のようなどっしりした白壁造りの店には目を見張った。市役所を過ぎると会津のシンボル鶴ヶ城の天主閣が見えてきた。天主閣に上がると三六〇度の展望が目の前に展けた。街の中を歩いている時は気付かなかつたが、天主閣から街を見下すと、会津が盆地であることがよく判る。

この若松の街も一歩裏道にはいると、消えさることなく脈々と続いている手仕事屋を、あちこちで垣間見ることが出来た。藍染めの会津木綿、絵蠟燭、あけび細工、赤べこ。『いいものはいいの』そういつて、時代の流れに棹さしている。これが会津人の一徹さを物語るものだろう。

鶴ヶ城は至徳元年(一三八四)慮名直盛によつて築かれた。當時は黒川城と呼ばれ、若松の町も黒川だった。

慮名氏は天正十七年(一五八九)伊達政宗に滅ぼされるまで会津に君臨していた。しかし政宗は会津を治めることもなく、戦国時代の真只中であつて豊臣秀吉に攻められ、遂に

これを明け渡した。

伊勢松坂の蒲生氏郷が天正十八年(一五九〇)会津に転封入城し、城郭を大改築して鶴ヶ城と命名し、城下町は若松となった。

氏郷の死後、上杉景勝、加藤嘉明らの戦国武将が居城としていた。嘉明の子明茂が寛永十六年(一六三九)まで治めていたが、その後徳川幕府の名士保科正之が天正二十年(一六四三)会津藩主となった。正之は三代將軍家光の弟で、以後徳川一族の松平氏が明治になるまで会津を治めた。

明治元年戊辰戦争が起つた。これは官軍と旧幕府側との合戦の総称で、鳥羽伏見の戦、上野彰義隊の戦、奥羽越前諸藩の白石同盟。会津の戦。五稜郭の戦等を含む戊辰の役である。会津戦争では最後まで官軍に抵抗した。官軍の猛攻撃を前に一ヶ月半も籠城して、会津人の根性と鶴ヶ城の名城ぶりを天下に強く印象づけたが、遂に落城のやむなきに至つた。鶴ヶ城は明治七年に取り壊されたが、昭和四十年に新しく天主閣が再建された。

会津藩は官軍を迎え討つに当って軍制を改革し、藩士を年令により区別した。それは、

- (1) 白虎隊 十六才から十七才まで
- (2) 朱雀隊 十八才から三十五才まで
- (3) 青竜隊 三十六才から四十九才まで
- (4) 玄武隊 五十才以上の武士

この四隊に分けて日夜激しい武技の練磨をしていた。梅雨も明けて八月に入ると、官軍は食糧弾薬に物を云わせて圧倒的優勢な武力で

会津攻撃を開始した。会津藩では白虎隊にも動員令を出し応戦に向けた。隊員たちは先祖伝来の太刀を執り、決死の抵抗をしたが力及ばず、殆んどが手傷を負い飯盛山に逃れた。刀を杖につき飯盛山に登ってみれば、炎と黒煙に包まれた若松の街や鶴ヶ城の天主閣。最早やこれまでも少年たちは或は自刃、或は刺しちがえて果てた。白虎隊員二十人のうち生き還つたのは飯沼貞吉ただ一人であった。

林 旭 萌

〒608 京都市北区上御堂上江町二三二
電話〇七五(四四一)〇六〇九番

残 暑 御 見 舞

箏流薩摩琵琶

西 眞 会 主 柿 沢 眞 峰

〒435 浜松市安松町三三ノ四
電話〇五三四(六一)三五五四番



四絃漫筆

島津天嶺

(一) はしがき

三年程前に私は幽絃と題して琵琶に関する随想をまとめたことがある。これは晩年は「琵琶の虫」になり切っていた亡父の十年祭を期に、生前の父の言動を「ネタ」にしたものであった。ところが九州の一隅に住み、諸先輩方との交流も殆んどなく、又自分で特に琵琶の研究をしていなかったため、早速御注意を頂いたり又あとで自分で誤りを発見して、翌年に「あとがきのとがき」という形で訂正書を出すテイタラク。

そのとき得た教訓はもっと資料を集め、もっと諸先輩方の指導を受け、もっと本を読み、筆をとるのはその後だということであった。ところがこのころ友人で病氣にかかったり冥土に旅立つ人もでてきたので、今は健康を誇っている私も何時どうなるかわからない、歳月は人を待たずというが、生命が人を待たずとれない、否健康が人を待たずとれない、元氣な間に書いておかないと私がどのように考えていたかがわからなくなる、少なくとも私の考えは正確には残らないと感ずるようになった。そこで「先づ書く」、そして間違っ

ていたら訂正してゆけばよいと考え直したのである。

幸いに植村先生のお許しを得たので一応タイトルを「四絃漫筆」として書かして頂くことになったが、上記のように未完成を承知の上での弄筆なので、ひとりよがりの奇論怪説もでてくることと思う。このような時は問題提起と観じて頂いて皆様方から御高見、御叱正を賜らば幸甚これに過ぎるものはない。

(二) 幽絃再録

若し幽界というものがあって、そこに父が生きているとすれば、やはり琵琶を弾いているであろう。

そしてその絃の音は幽かなものであろう。幽界の父と明界の私を結ぶもの、それは血の縁と琵琶の絃か。

琵琶のよきは幽玄にある。

こんな考えで私は幽絃という熟語を考え出し、私の書いた小冊子を幽絃と名づけた。この幽絃は「あとがきのとがき」をいれて二十二節、A5版四十頁足らず、内容もお粗末なものであるが、それでもその中から二つほど再録して皆様の御参考に供したい。

そのひとつは昭和二十三年公職を追放された父が、昭和四十三年八月八才で死去するまで、ひたすらに琵琶道に精進したその姿勢で、しかもそのことを父の死後初めて私が了解できたということである。このことについて私は幽絃の中で琵琶道入信というタイトルで、

残暑御見舞

筑前琵琶

柴田旭堂

上原まり

(旭艶)

〒651 神戸市中央区上筒井五ノ四ノ二
電話〇七八(二二)一六一番

(前略) 私は父が死んでから初めて琵琶と父との関係をハッキリ知ることができた。それまではただ「一所懸命やっているな」といった位の気持ちでいたし、琵琶が自分にとって神様だと言った父の言葉もそれほど真剣なものとは考えていなかった。

高令者の心理、いわゆるお迎えを待つ境地、これは若い私には理解し得なかったのはやむを得ないことであつたかも知れない。

高令になり死期が近くなると、誰でも何かを信ぜざるを得なくなるのではないか、そして父は自分の趣味である薩摩琵琶にそれを求め、日々、墨絵や老蘇の森などの歌を歌うことによって心を安らげていたのであろう。

私はこのことを知ってから「私も父と同じく趣味と宗教の両面を持つ薩摩琵琶をやろうと決心したのである(後略)」と述べているが、もちろん今もこの決意は変わっていない。

この六月上京したときにお会いした岡部錦蝶先生、辻清剛先生、お二人ともまだ琵琶に對する情熱を失っておられない。岡部先生が御得意の「辨の内侍」を一句のよどみもなく歌われたのには全く頭が下がる思いがした。

健康だから琵琶が弾けるのか、琵琶を弾くから健康なのか、何れも正しいのであろう。琵琶道に精進することによって長寿が得られるならばこれに勝る幸福はないように思う。

話が横道にそれたが、第二は琵琶は非常にユニークな楽器であるということである。幽絃の中で私は(前略)琵琶は、雅楽琵琶を除

いて、絃の長さや張力とを要えて音程を要える楽器で、三味線、バイオリンの類と異っている。琴も張力かえて音をかえるが、その範囲はせいぜい半音程度であつて到底琵琶の比ではない。

薩摩琵琶はこの他に撓面を叩くという特殊性がある。絃楽器で打楽器を兼ねるのだから、音楽理論からいえば極めて非合理的なものである。しかしそこに薩摩琵琶の生命があると思う。琵琶の「幽玄さ」は張力を微妙にかえて音を出すからである。(中略)薩摩琵琶には豪壮さが加わる。これは打楽器だからである。(後略)

当時私は絃打楽器は薩摩琵琶だけと思つていたが、田辺尚雄先生の本で琵琶の他に三味線も絃打楽器であることを知った。汗顔の至りであるが、しかし以上述べたことは間違っていないと思つている。

琵琶は数少ない絃打楽器のひとつ、そして薩摩琵琶は最も顕著な絃打楽器。そしてこのような珍しい楽器を弾くことができるのは琵琶人の誇りである。我々はこのことを認識して琵琶のよさをもっとPRしてよいように思う。

(附記) 筆者小伝

四明会員で昭和四十三年死去した島津詳の二男。大正元年十月生。本名は正。琵琶は昭和三年父の「手ほどき」で初める。その頃時々家にこられた浜田見養師に

筑前琵琶日本旭会

梅原旭濤

〒617 向日市西向日鶏冠井町山端二
電話〇七五(九二)四五一二番
(専用)

残暑御見舞

筑前琵琶日本旭会

教授 中島旭穂

旭穂会一同

〒602 京都市上京区樫木町堀川東入角
電話〇七五(二二)四〇三三番

基礎弾法を習う。就職後は父と弾交するのみ。
昭和四十三年十一月大阪市で催された父の米寿記念琵琶演奏会に初出演。その後は四明会、日本琵琶協会の演奏会にも出演している。
昭和五十四年三月より毎日が日曜日になり目下琵琶道と琵琶史の探究に「生き甲斐」を感じている。
住所は久留米市国分町一五三四。



京都琵琶協会の
納涼懇親会

うっとうしい梅雨も今日は朝からの曇り空で一滴も降らない七月十二日(日)昼一時、七月例会を兼ねて本部平井会長宅に集合、三時まで二、三会員の研修演奏があったあと、水内女史の輪旋により都心から車で約一時間、洛北貴船の料亭「右源太」から差廻しのバスに一同乗車、鴨川上流に沿って鞍馬連山の間を縫いながら岨々たる谿谷に囲まれた目的地に到着。料亭前の小川の瀬々らぎ上に床几を設け、よしずで天井や四囲をかこみ、数個のぼんぼりのほのぼのとした野趣満々の雰囲気浸る予定のところ、相憎く折からの小雨のた

め二階の畳敷日本座敷の大広間に席を移して、まづビールで乾盃、三巾前垂れをつけた大原女姿の奇麗な仲居さんたちが、次ぎ次ぎと運ぶ新鮮な数種の珍しい山川料理に舌鼓を打ちながら飲むほどに酔うほどに、琵琶より上手な隠し芸が続出し、充分の欲をつくして六時過ぎ再び料亭の車で市内まで送られ、和やかな半日を楽しく送ってそれぞれ家路についた。
(出席者) 馬場鴨水、西川磯水、楊嶽水、同夫人、田中敷水、高橋正雄、梅原旭濤、矢吹旭美津、安住旭康、牧南水、岸本港水、水内焼水、同御家族、平井春嶺、同夫人、植村寛水。



京都琵琶協会の
第二十六回八坂神社
琵琶奉納の記

祇園祭還幸祭の前日、二十三日はさすがに境内はひっそりして時々参拝の鈴音が聞こえる。また午後の陽ざしは能楽殿や会場テント、腰掛を照らして三伏の暑さを感じさせた。
会長、牧、馬場、高橋ら舞台準備に取りかかり拡声装置などすべて整う。
四時本殿に一同正座し、祝詞を畏く承わり心からなる拍手を打ち御祓を受く。
五時開演。

東西交流薩摩琵琶
一泊弾交会

恒例の首記本年は正絃会が当番で、七月二十六、七の両日房州一泊旅行を行った。従来「觀光」は附随的に考えられ、専ら演奏主体で同行全員が演壇に上る趣旨のもとに行われてきたが、今回は觀光主体で演奏時間が極限され、何となく勝手の違う感があったが、計画者遠藤鶴東師に対し一同深く感謝する。尚



本案最初の提案者四明会では、出席予定の平井春嶺師が急用欠席で残念であったが、四明会員豊明市の山之内兼光師が参加された。
さて浜松勢一行八名は二十六日朝七時五分発新幹線こだまで十時前東京駅着、総武線に乗り換えて途中乗車の松永琴城君や本橋仙舟清川嵐舟御夫妻らと雑談の中に千葉駅到着、お迎えの大富士岳餅、須田誠舟氏らの案内で他の方々と一緒に観光バスに乗車して久闊を叙したが、常連の仲川秀邦女史が微恙のため欠席とのことと颯爽たる淑姿に接し得なかったのは遺憾であった。

さて観光バスの一行は成田に直行、昼食。成田山新勝寺に参拝の後再び乗車、九十九里浜に出て快適な波乗の道路を南進する。紺碧の海、澄んだ空、海岸を埋めつくした華やかなビーチパラソルの色、安房ならではの印象的な観光風景に見惚れつつ小湊町のニュー小湊ホテルに到着、少憩の後広間に集合し、世話人遠藤鶴東先生の開会の辞、会員一同を代表して小野鶴彦先生の挨拶、地元文化団体役員某氏の歓迎の言葉があつて演奏会開催、一人十分程度で三時間、また地元各流派教氏の演奏、特に木原綾子女史の「近江源氏盛綱館」の熱演は極めて有意義であった。

第二日はホテル近くの豪荘な日蓮上人の誕生寺に自由参拝の後九時乗車出発、日蓮上人修業の清澄山、白浜燈台、館山、保田、富津、木更津と内房を觀賞しつつ千葉駅に到着、別れを惜しみながら散会した。

(演奏者と曲目) 蝦峨ー染谷鶴泉、紅葉狩ー徳武近水、足柄山ー中村鶴翔、由井正雪ー松永琴城、母の教ー川口暁江、桜ー竹原輝祥、坂本竜馬ー大石鶴伶、夢ー青島鶴瑛、知己ー大富士岳餅、絃部岳瑞、吉野の奥ー三上鶴浄、小松の操ー伊藤鶴麗、四ツの緒ー小野鶴彦。
(小野鶴彦、染谷鶴泉、伊藤鶴麗合記)

一声二節と云うけれど…
兎我野 純



美声の魅力もさる事ながら悪声も亦すてがたい。下手の横好きと云われる事は結構なこと、そうでない者から見れば洵に羨しい限りでもある。それは根こから琵琶を楽しんで居られるからである。浪曲では三ヶ月やってみて将来プロとして進めるか否かが決まるそうだが、勿論例外はあるが、でも最低限の基本だけは習得し度いものだ。創意工夫と個性の伸長とライバルとしての絃友があれば正に琵琶の楽しみも亦倍増するであろう。



山崎旭華女史
日本伝統芸能集団主催、熊本新聞社後援による琵琶、長唄、雅楽、歌舞伎などの邦楽界代表者を以て組織する芸能公演が六月二十八日から九州各地及び四国で連続開催され、二十八日熊本、二十九日佐世保、七月一日八幡、二日松山の各市民会館で公開されて好評を博したが、琵琶は山崎旭華女史(矢吹旭美津女史随行)が「井伊大老」を熱演して琵琶楽のため大いに気を吐き満員の大向うを唸らせた。

納涼邦楽演奏会

七月十二日(日)夕京都千本釈迦堂、協賛大阪琵琶同好会。義家ー米原、島津、絃旭嶺、岩壁の母ー小林一水、粟津の露ー辻旭城、那須与市ー石橋旭嶺、白虎隊ー田中敷水、井伊大老ー天津八千代、二〇三高地ー中島旭穂。外に詩吟、舞踊、剣舞、奇術等数番。

日本芸術琵琶普絃会七月例会

七月十九日(日)昼東京文京区大塚六丁目貸席京屋。異国の丘ー杉山富士代、湖水乗切ー内田隆昭、石童丸ー日比いね子、鶴ヶ丘ー佐藤旭尚、別れの盃ー鈴木好水、竜の口ー日比二水、異国の丘ー坂入晴峰、別れの盃ー金尾洲丈、異国の丘ー青木早水、未練西行ー金森旭弾、城山ー杉山旗水、大物の浦ー若宮旭登、恩讐の彼方ー長谷川錦舟、批評指導ー高田栄水。来賓山崎錦幽、永島裕両氏。(八月は休会、九月は二十日開催、尚来場希望者は時間